牧師の書斎「エステル記」の瞑想(改訂)

	エステル記	エステル記の伝えるメッセージ	2013
01	01章1～22節	王妃交代の経緯	11.19
02	02章1～23節	エステルが王妃となる	11.22
03	03章1～15節	ユダヤ人撲滅を公示したハマン	11.26
04	04章1～16節	エステルの決意	11.27
05	05章1～14節	エステルの賢さと冷静沈着な策略	11.29
06	6章～7章	隠れた神による逆転劇と自滅の論理	12.03
07	8章1～17節	プリムの祭りの救済史的意義	12.04
08	9章～10章	嘆きを踊りに変える神(プリムの祭の制定)	12.06

BC538年	クロス王の第一年	
BC536年	エルサレム帰還と神殿再建工事の開始	総督ゼルバベル、大祭司ヨシュア
BC530～522年	カンビュセス王の治世	再建工事は中止
BC522～486年	ダリウス王一世の治世	預言者ハガイ、ゼカリヤによって奮い立たせられる
BC520～515年	神殿再建工事の再開と完成	神殿再建工事の開始か20年後に完成
BC486～465年	クセルクセス一世(アハシュエロス)の治世	
BC479年	エステル、王妃となる	
BC475年	ユダヤ人虐殺計画	エステル記
BC465～424年	アルタクセルクセス一世(アタルシャスタ)の治世	
BC458年	エズラ帰還	エズラ記、歴代誌
BC445年	ネヘミヤ帰還、城壁完成	神殿が完成してから７０年後に城壁が再建された、ネヘミヤ記
BC433年	ネヘミヤ再度帰還	

Ⅰ	B.C. 539～515 クロス王/ダリウス王	クロスによる捕囚からの解放からエルサレムの第二神殿の完成まで	エズラ記 1～6 章
Ⅱ	B.C. 479～475 アハシュエロス王	エステルが王妃となることによって、ハマンによるユダヤ人絶滅から救う。プリムの祭の起源。	エステル記
Ⅲ	B.C. 458～445 アルタシャスタ王	祭司であり、律法学者のエズラがエルサレムに帰還し、トーラーを中心とした民の改革を始める。	エズラ記 7～10 章
Ⅳ	B.C. 445～433 アルタシャスタ王	ペルシア王の献酌官であったネヘミヤが崩れたエルサレムの城壁を再建する。	ネヘミヤ記

0-1 .エステル記の時代背景

0-2 .エステル記のメッセージ

●エステル記は異邦人のペルシア王国の支配の下に、ペルシアの首都スサ(シュシャン)を舞台にして、神の不思議な守りを体験したユダヤ人の物語です。神はエステルを通して、ご自分の民を絶滅の危機

から救われました。

0-3.　エステルの名前の意味

●「エステル」(אֶסְתֵּר)の意味は「隠す」という意味の動詞「サータル」(סָתַר)の 1 人称単数で、「わたしは隠れる」（I will hide）という意味。この「わたし」とは、神です。

0-4.　ペルシアの王「クセルクセス」のヘブル表記「アハシュエロス」

●エステル記の中に 30 回も登場するペルシアの王の名前「クセルクセス」の表記を、新改訳改定第三版までは「アハシュエロス」としています。そのヘブル表記は以下のように、「アハシュ」と「ローシュ」の間に「ヴェー」(ウェー)が入っていると思えば分かりやすいです。決して「アハシュ・エロス」ではありません。むしろ「アハシュヴェーローシュ」、あるいは「アハシュエーローシュ」です。

アハシュヴェーローシュ

אֲחַשְׁוֵרוֹשׁ

1. 王妃交代の経緯

【聖書箇所】エステル記 1 章 1 節～22 節

ベレーシート

●エステル記の主人公の「エステル」は 2 章で登場しますが、1 章はその登場の背景となった事件が記されています。不思議なことに、エステル記には一切「神」という言葉は出てきません。しかし神がいないわけではなく、**隠れたところで歴史を支配している**のです。目には見えなくとも、一つ一つの出来事の背後に神の配剤があるのです。

王妃ワシュティの廃位の事情

●具体的なことは記されていませんが、ペルシアの王アハシュエロス(クセルクセスとも言います)が、国威を示すための宴会を七日間催しました。身分の高い者たちを招いてのデモンストレーション的宴会でした。その宴会の最後の日(七日目)のクライマックスに、王は酒で心が陽気になり、王妃ワシュティに王冠をかぶらせて、王の前に連れてくるように家臣たち(王に仕える宦官たち)に命じました。王妃の美しさを集った者に見せびらかすつもりでした。ところが、この王妃は王の命令を拒んでしまったのです。

●王妃ワシュティがなぜ王の命令を拒んだのか、その理由は一切記されていません。王妃の弁解もありません。ワシュティの一つの不従順の行為が、国としての品位を落とし、国の面子をつぶすものと見なされました。王の七名の側近の中のメムカンの進言により、王妃ワシュティを廃位としてしまったのです。それは、王妃の王に対する侮辱によって国中の妻が夫を尊敬しなくなってしまうことを懸念してのものでした。

●しかしそれは王が「酒に酔っていたこと」、また自分の思いが通らなかったゆえの「憤り」が招いたことでした。その憤りは尋常なものではなく、「王は激しく怒り、その憤りは彼のうちで燃え立った。」(1:12)と記しています。王妃ワシュティの廃位は王の身勝手さが招いたとも言える事件です。しかし、この王の身勝手さがなければ、エステル記も書かれなかったと言えます。

●エルカナの二人の妻、ハンナとペニンナの二人の確執がなかったとすれば、預言者サムエルは生まれなかったのと似ています。そう考えるならば、人間の日常的な営みの中に神の隠されたご計画があることを教えられます。エステル記第一章の国家的面子の出来事の中に、神の**摂理**があったことをうかがわせます。

2. エステルが王妃となる

【聖書箇所】エステル記 2 章 1 節～23 節

ベレーシート

●王妃ワシュティが廃位した後、王に仕える若い者たちは、王のために、王国のすべての州に役人を任命して、**容姿の美しい未婚の娘たち**を捜し出し、その者たちをみなスサ(シュシャン)の城の婦人部屋に集めさせ、女たちの監督官である王の宦官ヘガイの管理のもとにおいて、化粧に必要な品々を与え、その中から王の心にかなうおとめをワシュティに代わる王妃とするように進言しました。

2-1. エステルの名前と素性

エステール

אֶסְתֵּר

●いよいよこの章から、主人公であるエステルが登場します。エステルのユダヤ名は「ハダッサー」(הֲדַסָּה)です。日本語聖書の表記は「ハダサ」。エステルの父の名前はアビハイル(2:15)ですが、両親とも亡くなったので、いとこのモルデカイに引き取られて育ちました。彼らはユダヤ人でした。15 節には、エステルが「彼女を見るすべての者から好意を受けていた」とあります。ということは、エステルの魅力はだれの目にも明らかであったことを意味します。単に容姿が美しいというだけではなく、だれからも好意を受けるような人格的魅力があったということです。

【新改訳】
彼女を見るすべての者から**好意を受けていた**
【口語訳】
すべて彼女を見る者に**喜ばれた**
【新共同訳】
見る人は皆、彼女を**美しいと思った**。

●「好意を受ける」と訳された部分は、名詞の「ヘーン」(חֵן)と動詞の「ナーサー」(נָשָׂא)で表わされています。「ナーサー」は「上げる、支持する、受け入れる」という意味ですが、名詞の「ヘーン」は「好意」を意味します。

2-2. この章に見られる旧約聖書の「四つの愛」の用語

●エステル記の第二章には、驚くべきことに、旧約聖書の中で使われている重要な「四つの愛の語彙」のすべてが登場して(用いられて)います。そのひとつはすでに挙げた「好意」と訳された「ヘーン」(חֵן)です。愛の語彙が使われている箇所を以下で取り上げてみます。

14 節「・そこの女は、王が**気に入って**指名されるのでなければ、二度と王のところには行けなかった。
15 節「・・こうしてエステルは、彼女を見るすべての者から**好意**を受けていた。」
17 節「王はほかのどの女よりもエステルを**愛した**。このため、彼女はどの娘たちよりも王の**好意**と**寵愛**を受けた。王は王冠を彼女の頭に置き、ワシュティの代わりに彼女を王妃とした。」

---

(1) 動詞の「愛した」(**アーハヴ**」אָהַב)
(2) 名詞の「好意」(**ヘーン**חֵן)
(3) 名詞の「寵愛」(**ヘセド**חֶסֶד)　※改定第三版では「恵み」と訳されています。
(4) 動詞の「気に入る」(**ヘーフェツ**חָפֵץ)。この語彙は他に 6 章で 6 回「栄誉を与えたいと思う」で使われています。

2-3. 王の暗殺を企んでいた二人の宦官の謀反を事前に王に告げたモルデカイ

●王からの寵愛を受けたエステルを通して、モルデカイは王を暗殺しようと企んでいた二人の王の宦官のことを王に告げました。王がエステルを自分の妻としなければ、二人の宦官によって暗殺されていたことと思われます。ユダヤ人の「モルデカイとエステル」とのコンビによって、王は殺されることなく、返って、王を暗殺しようとした二人の宦官が木にかけられて殺されたのです。これは、モルデカイとエステルの二人のコンビは、やがて、ユダヤ人を撲滅の危機から救い出すこととなる本書のメイン・イベントの伏線です。

3. ユダヤ人撲滅を公示したハマン

【聖書箇所】エステル記 3 章 1 節～15 節

ベレーシート

●エステル記で最も顕著なことばがあります。旧約聖書で 85 回使われていますが、そのうちの 57 回がエステル記で使われています。すでに 2 章 5 節で使われていました。3 章で 4 回登場するその言葉とは「イェフーディー」(**יְהוּדִי**)、つまり「**ユダヤ人**」です。3 章では「モルデカイの民族」とも表現されています。

●「ユダヤ人」という用語は、ユダ族の民たちが自分たちを称して使った用語ではなく、軽蔑用語として、異邦人が彼らを指して使った用語です。この「ユダヤ人」の撲滅が王の名において公示されたその原因とそのプロセスについて記しているのが、今回の第三章です。

3-1. ハマンの激しい憤り

●エステル記 3 章にはじめて登場する「**ハマン**」(「ハーマーン」**הָמָן**)という人物が、「この出来事の後」にはじめて登場するのです。「この出来事」とは、原文では複数になっているので、「エステルが新しい王妃となったこと」、および「王暗殺未遂事件」等を意味すると考えられます。ハマンはペルシアの王アハシュエロス(クセルクセス)によって引き立てられ、すべての首長たちの上の地位に置かれたナンバー・ツーの人物です。このハマンがなぜ王に引き立てられて昇進したのか、その理由については一切、聖書は記していません。しかし王が最も信頼する忠臣であったことは間違いありません。

●「**アガグ人ハメダタの子ハマン**」とあります。アガグ人はハマンの出身部族であり、アマレク人の王の名も「アガグ」(**אֲגַג**)です(Ⅰサムエル 15:8,9,20)。「アガグ人」(**אֲגָגִי**)が「アマレク人」と同義であるなら、イスラエルの敵である象徴です。民数記 24 章 7 節に、イスラエルの王(メシア)が「**アガグ**よりも高くなり、その王国はあがめられる」と預言されています。LXX では「アガグ」は「ゴーグ」(Γώγ)と訳されています(黙示録 20:6 参照)。

●王の家来たちはこのハマンに対して「ひざをかがめてひれ伏しました」。王がそうすることを命じたようです(2、3 節)。ところがこの「ハマン」に対してただ一人、ハマンの前にひざをかがめてひれ伏さない者がおりました。その人物こそユダヤ人の「**モルデカイ**」(「モルドハイ」**מָרְדֳּכַי**)でした。ハマンは自分に対して身をかがめてひれ伏そうとしないモルデカイを見て、「憤りに満たされた」(新改訳)「怒りに満たされた」(口語訳)「腹を立てた」(新共同訳)のでした。

●「憤りに満たされた」(新改訳)ということばは、「憤り、怒り」という名詞と、「満ちた」という「マーレー」(**מָלֵא**)の二つの言葉からなっています。名詞の「憤り」は「ヘーマー」(**חֵמָה**)ですが、エステル記では、王とハマンがその「ヘーマー」の主体となって使われています。前者の王の怒りは前王妃ワシ

ュティとユダヤ人を絶滅させようとしたハマンに対してですが、後者のハマンの怒りはモルデカイに対してです。

●この名詞の「ヘーマー」が聖書で最初に使われている箇所は創世記 27 章 44 節です。その箇所ではエサウが弟のヤコブによって長子の権利を奪われた後の「激しい怒り」といえば、その様子を思い描くことができるはずです。動詞の「ハーマー」(חָמָה)は、「騒ぎ立てる、荒々しくする、吠えたける」という意味です。動詞からも名詞の「ヘーマー」が想像できます。王の憤りも、ハマンの憤りもそのような怒りでした。しかし人の怒りの中にも神は働いておられるのです。

3-2. ハマンに対して、ひれ伏そうとはしなかったモルデカイ

●王の家来たちがみなハマンに対してひざをかがめてひれ伏したにもかかわらず、モルデカイだけはそうしませんでした。王の家来たちはモルデカイに対して「あなたはなぜ、王の命令にそむくのか」と言っています。ハマンに対する礼拝は王の命令ですから、そうしないことは王に背くことにもなります。

●ここで「ひれ伏す」と訳された動詞のヘブル語は「ハーヴァー」(חָוָה)です。本来は「かがむ」「ひれ伏す」という意味ですが、ここでは強意形のヒットパエル態が使われています。それは自らの意志で「礼拝する、身を投げ出す、敬意を払う」ことを意味します。そうした逆の真意が含まれる敬拝の拒絶が、ハマンをして、激しい憤りを満たされたのでした。それゆえ、ハマンはペルシア王国中のすべてのユダヤ人を根絶やしにしようとしたのです。

●ハマンはユダヤ人を絶滅させる日を先に決めようとしてくじを投げ、そのくじが第十二の月、すなわち「アダルの月」に当たりました。ちなみに、「くじ」と訳された「プール」(פּוּר)が「プリムの祭り」の「プリム」(פּוּרִים)の語源となりました。ハマンはそこで王に対する説得を試みました。王への説得の内容が 8 ～9 節に記されています。それによれば、説得の要点は以下の三点ですが、その裏にあるハマンの真意は述べられていません。

①ユダヤ人の法令はどの民族とも違っていて、それを遵守するために、王の法令を守っていないこと。
　⇒ここでハマンは自分自身の名誉が傷つけられたことは一言も語っていません。
②彼らをそのままにしておくことは、王のためにならないこと。
　⇒ここでもハマン自身にとっても益にならないとは一言も述べていません。
③この仕事の責任をハマン自身が全面的に負うということ。
　⇒ここではハマンは自分が全責任を取ることを明言することによって、ユダヤ人に対する完全な主導権を握ろうとしています。

●ハマンの説得を王が受け入れたために、第一の月(今日の 3～4 月頃)の 13 日に書記官が召集され、各州のリーダーたちへの命令が公文書という形で国中に送られました。それには、第十二の月(今日の 2～3 月頃) 、すなわち、アダルの月の 13 日の当日に「すべてのユダヤ人を根絶やしにして、彼らの家財をかすめ奪え」という命令が行使されるというものでした。猶予はわずか王の承認をもらってから 11 ヶ月し

かありませんでした。公文書が発布されたとき、ペルシアの首都スサ(シュシャン)の町は混乱に陥りました。

3-3. 内村鑑三の不敬事件

●モルデカイが王とハマンに対する不敬事件を起こしたように、日本でも、内村鑑三が不敬事件を起こしています。内村がその事件を起こしたのは、1891 年(明治 24 年)、内村 30 歳の時です。その二年前の 28 歳で結婚し、翌年、第一高等中学校の嘱託教員となります。そしてその翌年にこの事件を起こしました。事件を起こしたというと、内村が悪いことをしたということになってしまいますが、その真相はこうです(これ以降は「事件」という言い方をせず、「出来事」という言い方をします)。

●1891 年の 10 月には教育勅語が、天皇の名において発布されました。翌年の 1 月 9 日に行われた教育勅語の奉読式において内村が最敬礼をしなかったことで、同僚や生徒から反国家的行為として非難され、社会問題にもされました。内村としてはキリスト信仰による良心からの不敬でしたが、この出来事によって内村は体調を崩したため、2 月に依願解職されています。そして不幸なことに、4 月に彼の妻が死去しています。この信仰の試練の出来事は内村鑑三の信仰をさらに強め、より聖書研究に向かわせていったのです。

4. エステルの決意

【聖書箇所】エステル記 4 章 1 節～16 節

ベレーシート

●ハマンのユダヤ人撲滅の陰謀を知らされたエステルの狼狽と決意が記されているのが、この 4 章です。エステルが王妃となったことの神の深いご計画が隠されていたことを暗示する章です。

4-1. エステルの狼狽ぶり

●養父モルデカイが王の門の前の広場で、荒布を着て灰の上にすわっていることを知らされた王妃エステルは、4 節で「非常に痛み苦しんだ」(新改訳)と訳されています。新共同訳では「非常に驚き」と訳し、岩波訳は「非常に狼狽した」と訳しています。私的には岩波訳が原意に近いように思います。というのは、ここでは原語の「フール」(חוּל)の強意形ヒットパエル態が使われているからです。本来、「フール」は「跳ね回る」という意味ですが、ヒットパエル態では「ぐるぐる回る」という意味になるからです。まさに狼狽する姿です。それに「メオード」(מְאֹד)がついて、「**ひどく狼狽した**」という意味になります。

4-2. モルデカイとエステルとのやり取り

●エステルは事の真相を探るため、モルデカイのところに「ハタク」(「ハターフ」הֲתָךְ)という宦官を遣わしました。この宦官「ハタク」がエステルとモルデカイとの仲介役になります。忠実な伝書鳩のように務めを果たす人物、聖書はわざわざこの宦官の名前をこの章だけで四度も記している(4:5, 6, 9, 10)のには、ある種のメッセージ性があるように思います。

●モルデカイは彼にスサ(シュシャン)で発布されたユダヤ人撲滅の法令の文書の写しを渡し、それをエステルに見せて、事情を知らせてくれと言い、また、エステルに王のところへ行って自分の民族(ユダヤ人)のために王にあわれみを請うよう言い伝えました。しかし、それは王妃といえども簡単なことではありませんでした。王からの呼び出しがないのに、王のところへ行く者はだれでも死刑に処せられるという一つの法令があったからです。

●そのことを聞いたモルデカイは、エステルに「**あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない**」という有名なことばを発します。「この王国に来た」とは、エステルがこの国に迎え入れられ、王妃としての位に着いたことを意味します。「もしかしたら、このような時のためかもしれない」とモルデカイは諭したのです。この諭しに、エステルの心は定まったのです。

4-3. エステルの決意

【新改訳 2017】4 章 16 節
「行って、スサにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食してください。三日三晩、食べたり飲んだりしないようにしてください。私も私の侍女たちも、同じように断食します。そのようにしたうえで、法令に背くことですが、私は王のところへ参ります。私は、死ななければならないのでしたら死にます。」

●この部分には、いのちを賭けたエステルの三つの決意を見ることが出来ます。

(1) **断食します**・・旧約では「断食」は「祈り」と結びついています。三日間の文字通りの断食を伴った祈りをすること。
(2) 法の定めに逆らっても王のもとへ**行きます**・・あえて法に背いてまで
(3) 死ななければならぬなら、**死にます**・・そのことで自分が死んだとしても本望とするという意味。

5. エステルの賢さと冷静沈着な策略

【聖書箇所】エステル記 5 章 1 節～14 節

ベレーシート

●人が危機に遭遇したり、いのちを賭けるような状況に追い込まれたりするとき、それまでは見えなかった能力が突如として発揮されることがあります。これまでのエステル像といえば、外見が美しく、またどんな人からも好意をもたれるという内から輝く魅力ある女性でした。ところが、彼女はそれ以上の能力を実は秘めていたことがわかります。そのことを見せてくれるのが、エステル記 5 章です。

●問題はきわめて深刻な状況にもかかわらず、王妃エステルの取った策には、決して感情的になることなく、きわめて冷静沈着な賢さを見ることが出来ます。それは一度限りのチャンスという切迫感が、エステルのうちに隠されていた面を浮き彫りにさせたのかもしれません。いずれにしても、5 章後半に出て来るハマンの妻ゼレシュの性格とは全く対照的です。

5-1. 王妃エステルの宴会への招待

●三日間の断食を伴う祈りを支えに、エステルは法令を犯して、王の前に立ちます。王の召しなく、王の前に立つことは死刑に処せられるはずでしたが、その心配は消え去り、難を逃れることが出来ました。そして、エステルは王のために設ける宴会の招待をします。その折、ハマンもそこへ一緒に来られるよう懇願します。そして王とハマンはエステルが設けた宴会に出ました。そして、再び、翌日に設ける宴会にも招待します。

5-2. 王妃エステルの画策(策略)の真意

●エステルが主催する「王のための宴会」と称して、王とハマンが招待されます。その真意はなんだったのでしょうか。考えられる意図をいくつか挙げてみたいと思います。

(1) 自分に対する**王の心を確かめる**ため
(2) ハマンを王と特別な関係と見なすことで、**ハマンを油断させる**こと
(3) 自分の願いを簡単に言わずに、ここぞという**絶妙なタイミングを見計らう**ため
(なぜなら、エステルはチャンスは一回限りとみなした)
(4) **自分のペースで**事を運ばせるため

●結果的には、エステル一人だけでは事をうまく運ぶことはできなかったのですが、彼女は自分にできることをしたのです。

5-3. ハマンの感情の起伏の大きさ

●5 章にもハマンの高ぶりから来る感情の起伏の大きさが目立ちます。エステルに招かれての宴会で、彼は非常に喜び、上機嫌で宴会の席から出て行きます。ところが、王の門のところでモルデカイが自分のことを少しも恐れないのを見て、憤りに満たされてしまいます。そして家に帰って、友人や自分の妻の前で、自分のことを誇りました。そして彼の友人や妻の進言に従って、モルデカイをかける柱を立てさせました。

●王妃エステルに対して、ハマンは何ら身を構えることをしなかったのです。それが彼の命取りの一要因となっているのです。

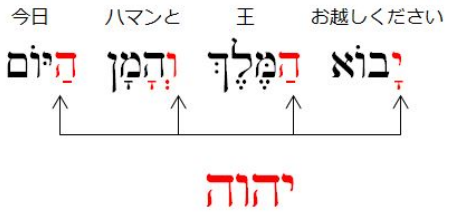
6. 隠れた神による逆転劇と自滅の論理

【聖書箇所】エステル記 6 章 1 節～7 章 10 節

ベレーシート

●エステル記 6～7 章は、ユダヤ人の迫害と滅亡の陰謀が王に知られることで、事態は逆転し、陰謀を図ったハマンは自滅してしまうという実に痛快極まる話です。

●本書には「神」、あるいは「主」ということばが出てきません。しかしそのことばが使われていなくても、十分に神が働いておられることが分かります。



●「**ヤ**ーヴォー、**ハ**ンメレフ、**ヴェ**ハーマーン、**ハ**ッヨーム」このことばは、王妃エステルが王とハマンを自分が主催する宴会に招いたことばですが、そのことばの中に、主の名前を意味する「**神聖四文字**」(**יהוה**)が隠されています。エステルはそのことを意識してはいないでしょう。しかしながら、このエステルの招きのことばの中に神のドラマが隠されていたのです。

6-1. 神のドラマの目的は神の栄光の現われ

●神のドラマは、神の栄光を現わす最高の表現です。そのドラマの中に、人間の創造、堕罪、エデンからの追放、イスラエルの民の選び、王国の崩壊とバビロン捕囚、ユダヤ人根絶やし計画といった事柄が組み込まれています。神は、静的な存在ではなく、常に動的な存在であり、またそのような働きをなしておられます。神と人とのかかわりのドラマのはじめと終わりです。そこには神の栄光の顕現という目的があります。

●ヨブ記にあるヨブの苦難には、そのドラマの裏舞台が記されています。しかし人間にはその裏の舞台が見えないために、ヨブに起こった悲惨な出来事について、ヨブの友人たちがその原因を探ろうとして、ああでもない、こうでもないと論じます。ヨブも彼らに対して自分の弁を述べますが、最後で、神はヨブには知らないことが多くあることを示されます。ヨブはドラマの舞台裏を知らないことを認めたとき、はじめてその苦難から救い出されます。

●このように、私たち人間には、また個人にとっても、知らされていない神のドラマの裏側があることを認める必要があります。表面的に神が登場していなくても、それも神のドラマの一面なのです。エステル記 6～7 章は、まさに神の奇しきみわざ(The wonder of His hands)を見ることが出来ます。

6-2. ごく日常的な営みの中にも神は働いておられる

●エステル記 6 章の冒頭には「その夜、王は眠れなかった」とあります。眠れないことがあるというのは、ごく普通の日常的な事柄です。ところが、そのごく日常的な事柄の中に神のドラマが、人間的には想定外のピースがあったのです。

●「その夜に」(「バ・ライラー　ハッフー」בַּלַּיְלָה הַהוּא)とあるように、「その夜」は特別なドラマの転換点です。「その夜」の出来事がなかったとしたら、ハマンの陰謀を阻止することはできなかったかもしれません。想定外の展開なのです。しかも「その夜」は王妃エステルが全く参与できない事柄でした。

●「その夜に」なにが起こったのか。「王は眠れなかった」のです。「眠れない」という表現をヘブル語では「眠りが逃げていく」という表現をします。彼らが王の命令で年代記を読んでいると、王を暗殺しようとする企てをモルデカイが報告したと書いているのを発見したのです。王はそのために自分が何もしていないことを知りました。

●そこにハマンがモルデカイを殺すために上奏しようと王のところにやって来ました。まさに**絶妙のタイミング**です。王はハマンに「王が栄誉を与えたいと思う者に対してどうしたらよかろう」と打診します。するとハマンは、「王が栄誉を与えたいと思う者とは、私以外にだれがいるだろう」と聖なる誤解をしながら、実に具体的なすばらしい待遇を王に進言しました。王はそれを「モルデカイにしなさい」と命じ、さらに「**あなたの言ったことを一つも怠ってはならない**」と付け加えました。まさに、完全なる逆転劇が起こったのです。

6-3. 自滅の論理

●詩篇の中には、しばしば「自滅の論理」があります。神に敵対する者が神にある者たちに戦いを挑んだり、悪を謀ったりする場合は、それを謀る者の方が自分のしかけた罠にはまることを意味します。たとえば詩篇 58 篇がその一つです。悪者は必ず自分の仕掛けた罠に陥ってしまうことが語られています。

⇒「詩篇 58 篇に見る自滅の論理」

●ハマンは王の命令ひとつで、モルデカイのために用いるはずだった柱に掛けられてしまいました。モルデカイはハマンの家のみならず、彼に与えられていたその栄誉さえも受ける者となったのです。

●まさに、自分にひれ伏さないモルデカイを殺そうと謀ったハマンの策略に、ハマン自身がまんまと「**ハマった**」のです。この出来事が、ユダヤ教の「プリムの祭り」の起源となりました。

7. プリムの祭りの救済史的意義

【聖書箇所】エステル記 8 章 1～17 節

ベレーシート

●エステル記 8 章には、ユダヤ人が絶滅の危機から救われた喜びを記念する「プリムの祭り」の起源的出来事が記されています。まさに、ユダヤ人の栄誉があかしされた出来事です。その基調は「**喜び**」です。

7-1. 王の名によって発布された公文書撤回を嘆願するエステル

●ハマンは自滅したものの、ハマンが王の名前で発布したユダヤ人絶滅の公文書はそのままでした。そのために、エステルは王の前に出て、ハマンがユダヤ人に対してたくらんだわざわいの公文書を撤回するために、王の前にひれ伏して嘆願しています(3 節)。なぜなら、ひとたび王の名で書かれ、王の指輪で印が押された文書は、だれも取り消すことができないからでした。できるのはただ一人、王のみです。

●幸いにも、エステルの嘆願は王に受け入れられ、急遽、先の文書を取り消すための新たな文書が、王の名と王の指輪の印が押された「詔書」が早馬に乗る急使によって書き送られました。現代でいう速達便、あるいは電報といったところです。

7-2. プリムの祭りの救済史的意義

(1) 自滅したハマンのすべてを継承したモルデカイ

●王は王妃エステルにユダヤ人を迫害しようとしたハマンの財産を与えましたが、エステルはそれをモルデカイに管理を任せました。そしてモルデカイはハマンがもっていた財産と栄誉(王の指輪と地位)を継承しました。

(2) 王からの栄誉が与えられたモルデカイ(ユダヤ人)

●「栄誉」と訳されたヘブル語は「イェカール」(יְקָר)です。その動詞の「ヤーカル」(יָקַר)は、尊い、高価である、重いという意味です。名詞の「イェカール」は、旧約全体で 24 回使われていますが、そのうちの 10 回はエステル記にあります。いわば、エルテル記の特愛用語です。その「栄誉」がモルデカイとユダヤ人全体に与えられています。その栄誉が誰の目にも明らかになったとき、そこに爆発的な喜びが湧き上がりました。その様子が 15～17 節に記され、プリムの祭りの性格が暗示されています。

【新改訳 2017】エステル記 8 章 15～17 節

15 モルデカイは青色と白色の王服を着て、大きな金の冠をかぶり、白亜麻布と紫色のマントを

まとって、王の前から出て来た。すると、スサの都は**喜びの声にあふれた**。
16 **ユダヤ人にとって、それは光と喜び、歓喜と栄誉であった。**
17 王の命令と法令が届いたところは、どの州、どの町でも、**ユダヤ人は喜び楽しみ、祝宴を張って、祝日とした。**この地の諸民族の中で大勢の者が、自分はユダヤ人であると宣言した。それはユダヤ人への恐れが彼らに下ったからである。

●モルデカイが「青色と白色の王服を着て、大きな金の冠をかぶり、白亜麻布と紫色のマントをまとって」スサ(シュシャン)の城から出て来た時の姿は、やがて再臨されるキリストの姿を彷彿とさせます。その姿はまさに王の姿です。また 15 節にある「マント」と訳されたヘブル語は「タフリーフ」(תַּכְרִיךְ)で、ここ一回限り使われている言葉です。黙示録 1 章 13 節で使徒ヨハネは、「足まで垂れた上着を着た」復活された栄光のキリストの姿を見ています。モルデカイの着ていたマントもそれを暗示していると言えます。しかもそれは大祭司の着る上着でもあります。モルデカイの姿は、大祭司であり、王である風采をして人々の前に姿を現わしたのです。

(3) 再度、ユダヤ人が神からの栄誉を与えられるとき

●エステル記 8 章の出来事は、やがてキリストの地上再臨での出来事の型としてみなすことができます。キリストの地上再臨の目的は、獣と呼ばれる反キリストによる大迫害を受けているイスラエルの民を救うために来られるからです。それは、王の王、主の主として、反キリストの軍勢を打ち負かし、悔い改めたイスラエルの民を救い、彼らに約束していたすべてのことを成就して、この地上に御国を来たらせます。しかもキリストが天から来られる時には、すべての聖徒たち(キリストの花嫁)とともに来られますから、地上で婚宴の大祝宴会がもたれます。そのときにはこの上ない喜びに包まれることでしょう。

●ユダヤ人は毎年、プリムの祭りを行っていますが、この祭りの真の意味に目が開かれていません。プリムの祭りに啓示されているのは、「終わりの時」に彼らに起こる預言的な出来事なのです。その意味で、「プリムの祭り」には救済史的な意義があるのです。

7-【付記】

●「アダルの月にはいると、喜びが増す」ということばが、ユダヤ社会やイスラエルのシナゴーグ、家庭で耳にするほどに、ユダヤ人にとって「プリムの祭り」はそれほど楽しみな祭りのようです。

●アダルの月 14 日の夕方、シナゴーグでは「エステル記（メギラー）」の朗読が行われます。朗読は独特の節回しで進められていき、エステル記 3 章に入ると雰囲気が一変します。なぜなら「ハマン」が登場してくるからです。朗読者が「ハマン」と読む度ごとに、聴衆は机を叩いたり、足を踏み鳴らしたり、ガラガラを鳴らしたり、声をあげたりと、騒然となります。とは言っても、それは憎しみや憎悪感を表現しているわけではなく、いたって和やかで、楽しげです。なぜなら、「スィムハー　ヴェサソン　ライェフディーム（ユダヤ人に歓喜と喜び）」がメインテーマだからです。

8. 嘆きを踊りに変える神 (プリムの祭りの制定)

【聖書箇所】エステル記 9 章 1 節～10 章 3 節

ベレーシート

●**アダルの月(第 12 の月)の 13 日**、この日に、ユダヤ人の敵がユダヤ人を滅亡しようと望んでいたにもかかわらず、それが一変して、ユダヤ人が自分たちを憎む者たちを征服することとなった記念すべき日です。

1. 悲しみが喜びに、喪の日が祝日に

●エステル記 9 章 1 節と 22 節に「一変する、変える」と訳されたヘブル語動詞の「ハーファフ」(הָפַךְ)が使われています。「状況を一変させる、ひっくり返す、転倒する」という意味です。かつて、ハマンがユダヤ人たちを撲滅させる日をくじで決めようとしたところ、その日がアダルの月の 13 日と出ました。ところが、その日がハマンとその家族、および同じくユダヤ人を憎む者たちにとっての喪の日となったのです。

●「ハーファフ」(הָפַךְ)は、詩篇 30 編 11 節(新共同訳は 12 節)で「**あなたは私のために、嘆きを踊りに変えてくださいました。**」とあるように、主はご自身の民を、「嘆き」から「踊り」に変えてくださる方だとダビデは告白しています。その事実が如実に表されている出来事がエステル記物語です。しかもその出来事は「プリムの祭り」として、その後のユダヤ人たちの祝日として制定されたのです。

●この「プリムの祭り」は、ユダヤの暦では、唯一、飲酒が前提とされた、ばか騒ぎが許容されている日のようです。その日、シナゴーグではエステル記の朗読がなされますが、ハマンの名前が読み上げられるたびに、人々はカタカタと音のなるおもちゃで、ブーイングを鳴らす習わしのようです。

●「嘆き」を「踊り」に変えられる神は、その歴史において、「海」を「かわいた地」に変え、川の水を血に変え、また人の心を変えられる方でもあります。

【新改訳 2017】エレミヤ書 31 章 11～14 節

11 【主】はヤコブを贖い出し、ヤコブより強い者の手から、これを買い戻されたからだ。
12 彼らは来て、シオンの丘で喜び歌い、【主】が与える良きものに、穀物、新しいぶどう酒、オリーブ油、羊の子、牛の子に喜び輝く。彼らのたましいは潤った園のようになり、もう再び、しぼむことはない。
13 **そのとき、若い女は踊って楽しみ、若い男も年寄りも、ともに楽しむ。「わたしは彼らの悲しみを喜びに変え、彼らの憂いを慰め、楽しませる。**
14 祭司のたましいを髄で潤す。**わたしの民は、わたしの恵みに満ち足りる。**――【主】のことば。」

2. 人々はユダヤ人を恐れた

●8 章 17 節では「王の命令と法令が届いたところは、どの州、どの町でも、ユダヤ人は喜び楽しみ、祝宴を張って、祝日とした。この地の諸民族の中で大勢の者が、自分はユダヤ人であると宣言した。それはユダヤ人への恐れるようになった」とあります。9 章 2 節にも「彼らの恐れが、すべての民族に下った」とあります。ユダヤ人たちは事態が一変したことで、「自分たちに害を加えようとする者たち」を殺しました。それはあくまで、自分たちの民族を守るためでした。その証拠に、聖書は、ユダヤ人は自分たちを迫害する者たちを滅ぼしましたが、彼らは「略奪品には手を出さなかった」とあります (9:10,15,16)。つまり、自分たちに敵対する者たちを殺しても、それは略奪のためではなく、あくまでも自己防衛的行為であったことが強調されています。そうした一連の行為の中に、人々の中にユダヤ人たちを支えている神に対する恐れが生じたのではないかと思います。

3. 人々はモルデカイを恐れた

●9～10 章には、神を恐れるモルデカイについての地位的昇進についての記述があります。

【新改訳 2017】

(1) 9 章 3～4 節

3 諸州の首長、太守、総督、王の役人もみなユダヤ人たちを支援した。モルデカイへの恐れが彼らに
下ったからである。
4 実際、モルデカイは王宮で勢力があり、その名声はすべての州に広がっていた。実に、この人物モル
デカイは、ますます勢力を伸ばしたのであった。

(2) 10 章 3 節

3 実に、ユダヤ人モルデカイはクセルクセス王の次の位にあって、ユダヤ人にとっては大いなる者であり、多くの同胞たちに敬愛された。彼は自分の民の幸福を求め、自分の全民族に平和を語る者であった。

●アハシュエロス(クセルクセス)の治世は B.C.465 年までです。その後に王となったアルタシャスタ王の治世の時代に、エズラとネヘミヤが登場しています。彼らが王から好意的な支援を受けることができたのも、エステルやモルデカイが前もってユダヤ人としての良いあかしを立てていたからだと言えなくもないのです。

プリムの祭りにちなんで、有志とともに「エステル記」を味わう

2019.3.20

付　記

●ハマンは「アガグ人」で、彼はＩサムエル記 15:8 のアマレク人アガグ王の子孫と言われています。（ユダヤ教の伝統）サウル王は神によってアマレク人を完全に「聖絶」するよう命じられていたにもかかわらず、アガグ王を生け捕りにし、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての良い物は聖絶せずとっておきました。しかし、サムエルはサウル王に命令を守らなかったことを非難しましたが、サウル王は自分の面子を気にして言い訳をするだけでした。しかし、サムエルはサウル王に厳しく王位は取り去られると預言しました。

●さて、時代は下ってアガグ人ハマンがペルシアの宰相である時、モルデカイはエステル記 2:5 に「ベニヤミン人キシュの子シムイの子ヤイルの子」と書かれています。サウル王はベニヤミン族であり、同族のモルデカイが、その姪（あるいは従妹）であるハダサ（エステル）と共に、ユダヤ人を殲滅しようとするハマン（アマレク人の子孫）を逆に滅ぼしました。**過去、サウル王が失敗したツケは、子孫によってきっちり払われている**ことが、この物語の中にははっきりとは示していませんが、聖書を通して読むと見えてくるものがあります。http://messianic.jp/05-feasts/purim.htm より引用。

ユダヤの暦と祝祭日の一覧

	ユダヤ暦月	西暦月	祝祭日	内容
1	ニサン	3-4	ペサハ(15-21日)	過ぎ越しの祭り
2	イヤール	4-5	ラグ・バオメル(18日)	オメルの33日目
3	シバン	5-6	シャブオット(6日)	七週の祭り
4	タムーズ	6-7	***	***
5	アヴ	7-8	ティシャ・ベアヴ(9日)	神殿崩壊日
6	エルール	8-9	***	***
7	ティシュレー	9-10	ローシュ・ハシャナ(1-2日) ヨム・キプール(10日) スコット(15-21日) シムハット・トーラー(22日)	新年 贖罪日 仮庵の祭り 律法の祝典
8	マルヘシュバン	10-11	***	***
9	キスレブ	11-12	ハヌカ(25日)	光の祭り
10	テベット	12-1	***	***
11	シュバット	1-2	トゥ・ビ・シュバット(15日)	樹木の新年
12	アダル	2-3	プリム(14日)	エステル記の祭り